白秋の思ひ出

明治18年、柳川市の沖端で生まれた詩聖・北原白秋は、生涯故郷・柳川を愛し続け、この地の風土はその作風に大きな影響を与えたともいわれています。市内には、今でも白秋ゆかりの地が残されています。

白秋生家　沖端町（MAP 2-⑱）

北原白秋の生家は、代々柳川藩の御用達を務めていたほどの名家でしたが、明治34（1901）年の大火で大部分が焼失してしまいました。その後、所有者が変わるなど紆余曲折あり、一時は取り壊しの話もありましたが、昭和44（1969）年に県文化財史跡の指定を受け、白秋の少年時代の姿に復元されました。

館内には著書や遺品が展示され、在りし日の白秋に思いを馳せることができます。

また、生家南側には歴史民俗資料館があり、1階には柳川の歴史・民俗についての資料が、2階には白秋関係の資料が多数展示されています。

白秋詩碑苑　矢留本町（MAP 2-㉑）

白秋の母校・矢留小学校に隣接して建てられている詩碑は、市内に多く見られる文学碑の中でも最も古いもので、昭和23（1948）年に柳川市出身の作家・長谷健の呼びかけに応じて全国から寄せられた浄財によって建立されました。碑文となったのは、昭和16（1941）年に作られた白秋最後の思郷の詩といわれる「帰去来」です。

詩碑周辺は「白秋詩碑苑」として整備され、白秋の詩歌に詠まれたからたちなどの植物が植えられています。

この詩碑苑は、白秋祭式典や白秋生誕祭など白秋ゆかりの行事の会場としても利用されています。

白秋道路　鬼童町～新外町（MAP 2-⑲）

白秋が中学伝習館に通ったといわれる道で、屈曲した道路が掘割沿いに走っており、白秋の詩歌を生んだ詩情豊かな散歩道です。

現在は、鬼童橋から藤平門橋までは「水辺の遊歩道」として整備されており、当時の面影は薄れつつありますが、市民の憩いの散歩道として親しまれています。

松月文人館（懐月楼跡）　三橋町高畑（MAP 2-⑳）

明治40（1907）年夏、5人の若き詩人たち（与謝野寛、北原白秋、木下杢太郎、吉井勇、平野萬里）が、南国にロマンを求めて九州の南西部を旅行し、そのことを紀行文「五足の靴」に書き記しています。この日本近代文学史に名を残す旅の拠点となったのが、柳川の懐月楼（かいげつろう）でした。

現在は、松月文人館として、そこを訪れた北原白秋、野田宇太郎、劉寒吉をはじめとする多くの文人達の残した色紙、書簡、写真等が展示されています。また、隣接して五足の靴ゆかりの碑も建立されています。

白秋祭（水上パレード）

白秋の命日11月2日には、白秋詩碑苑で式典が行われます。小中高校生の献詩の表彰や「帰去来」の合唱で、偉大な詩人を偲びます。

また、この日をはさんだ前後3日間、川下りコースでは、ほおずき提灯やアンドンで飾られた百数十隻のどんこ舟に約2,000人が乗り込み夕闇の掘割を下る、水上パレードが開催されます。連日、白秋の童謡や歌曲の合奏、合唱が行われ、花火が打ち上げられます。